PS-056-1

腫瘍性病変に対するCompletion pneumonectomy
の検討

大阪市立総合医療センター呼吸器外科
髙演誠, 山本良二, 中嶋隆, 舟木壮一郎, 多田弘人

【目的】当センターにおける腫瘍性病変に対するCompletion pneumonectomy
(CP) 症例をretrospective に検討する。【方法】1993年12月から2006年11月までに施行されたCP
24例のうち腫瘍性病変に対する手術8例を対象とした。男性：女性 = 6:2, 発見年齢は62.5±13.6
(38-81) 歳, 原発性肺癌6例, 異時性再発例1例, 局所再発5例, 転移性肺膿1例。先
行手術は, 上葉切除2例, 下葉切除2例, 下葉切除+気管支形成, PA
形 remained, 右上葉切除1例, 左肺部分切除(5例)1例。初回手術に
よるうちの薬剤は, 50.1±37.1月 (10-104) 中央値19.1月。
【成績】術後 L/R=1/7, 手術時間320±94.6分。アプローチは, 異時
切開6例, 胸骨正中切開+肋間開胸2例, 腦性血管処理は7例, 人工心肺使
用は1例, 脈内は4例に施行した。術後合併症は, 胸骨裂傷炎および膿胸1例, 呼
吸器1例, 重篤死亡及び手術関連死亡は認めなかった。CP 手
後平均生存期間は, 1例3年生存率は, 71.4%であった。【結語】当センターにおけるCP
症例を検討した。CP までの
平均観察期間は 50ヶ月と長期であった。原発性肺膿症例は、主に左側の局
所再発例に対して手術が施行されていた。初回手術後他病期の再発例に
ても、CP は有用な治療の選択肢になり得ると考えられた。

PS-056-2

肺腺癌術手術不能例に対する部分切除術と放射線治療
の治療成績の検討

熊本中央病院呼吸器科
丸山正子, 丸塚孝, 役勝寺哲志

【目的】臨床病期I 期非小細胞肺癌においては葉切除が標準治療となるが、併
存癌のため手術手術が不可能であることも多い。部分切除術と放射線治療
の治療成績について検討した。【対象】1997年から2005年当院にて治療を行っ
た非小細胞肺癌のうち、臨床病期I 期及びIIIA 期を対象とした。【結果】部分切除手術を施行した24例中、平均年齢69.6(56-80)
歳、男性 = 16/8例、AD/ASQ = 16/8例、cIB/IB = 3/1例、PSは全例、放射
線療法症例は46例中、平均年齢77.3(67-87) 歳。男性 = 35/11例、AD/ASQ =
23/23例、cIB/IB = 2/14例、PSは10/2/1/3/2/10/3/1例、全死亡から
の生存率（3月/5年）は、CP で91.7%/22.2%、放射治療では63.9%/44.2%と有意差
をもってCP切除群の手術良好（p=0.04）、組織型別にみた生存率（3月/5年）は、
AD でCP切除群は57.5%/85.7%、放射治療群は585%/31.2%と有意にCP切除群の手術良好
（p=0.015）,一方 SQ切除群は100%/50%，放射治療群は68.6%/53.3%と手術を
は見握られなかった。再発群は、再発例でCP切除群単独治療群、放射治療群として11例
（うち再発例再発2群）。手術と放射治療を併用した治療群はなかった。【結論】切除	非小細胞肺癌に対して部分切除術および放射線治療を検討するとき、CP 群	は当治療を主には同等の治療効果が見られたが、AD では部分切除において	優れた手術が得られていることからの限り部分切除を行うことが望まし	いと考えられた。

PS-056-3

原発性肺膿における胸壁合併切除断端再発例の検討

栃木県がんセンター呼吸器外科
石川義登、松篤治、中村、理恵、鈴木、晴子

【背景】胸壁浸潤を伴う肺膿に対しては胸壁合併切除にて完成切除が達成でき
るか否かの観点で放射線治療を検討。特に、胸壁合併切除では術中に断
端再発を診断することが困難な場合があり断端再発例では、術後に放射線治
療が試みられるがその有効性は不明である。【方法】1996年から2000年までに手
術12例のうち胸壁合併切除がおこなわれた2B 期の
3例。術式は、胸壁切開＋肺門部切除術の再発例を対象として、補助療法、
再発形態、予後について検討した。【結果】内訳は、全例男性、年齢は、
65歳から79歳。全例で術後放射線照射50～56Gy 施行、全例術後化学療法
照射が施されている。累積投与量は2〜8.5Gy、病理学的リンパ節転移の
N0が2例、N1が1例で断端再発の理由は、回帰線切開による再発として
、全例1年以内に再発、再発形態、肝転移1例、脳転移1例、肝転移1例、腎
野再発4例中2例、全例3年以内であった。【考察】断端再発例で、
術後再発治療を伴ないにもかかわらず手術で断端再発が認められ
ていることから、術前に放射線化学療法にて微小転移の制御と完全切除
後の向上を計るべきと思われる。

PS-056-4

「山梨県立中央病院内科」 「山梨県立中央病院呼吸器内科」
横井裕之1, 羽田真朗2, 宮下義昭3

【目的】進行期非小細胞肺癌に対して救急外科切除（Salvage hand
術）を施行した3症例

1. 進展期非小細胞肺癌に対して救急外科切除（Salvage hand
術）を施行した3症例

横井裕之1, 羽田真朗2, 宮下義昭3